



しゃべらないノッポさん

日曜に想う おも

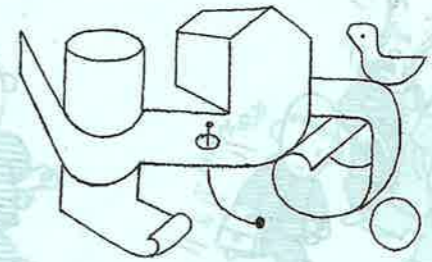
編集委員 吉田純子

朝日新聞 2023.5.28

声優さんの訃報に接した時、自分でも驚くほどの喪失感を味わうことがある。ここまで声というものが、聴く人それぞれの無意識、そして人生に深く刻まれるものなのかと。ノッポさんこと俳優の高見のつぼさんが、昨秋亡くなっていった。そう聞いて、似たような感覚に陥った。しゃべらないノッポさんは、声なき世界で音を、言葉を、心の中で創造する自由を教えてくださいました。芸人だった父譲りのプロ意識。フレッド・アステアに憧れて、磨き抜いたタップダンス。チャプリンさながらに、人生は夢を見るに値するや、子供たちの心にささるやきかけた。

(一部 省略)

しゃべらないノッポさんは、うまくしゃべれない子供だった私の「友達」になってくれた。特定の子音が続くのが詰まり、どもり、時には声すら出なくなると。学校に行くこともしんどくなった。ただただ楽しんで、それでいて元気や明るさを



「記憶の形」

絵・皆川明

を押しつけてこないノッポさんに、私は居場所をもらった気がした。今なお私は、しゃべれない言葉をそのつと、瞬間的に別の言葉に置き換えている。伝わらず、落ち込むこともある。でも、それで私という人間の価値が下がるわけじゃない。心優しいノッポさんは、私の無意識に「尊敬」の本質を植え付けてくれたのだと思う。コンプレックスに感じることも、知られたくないと思

うことも、すべて含めてかけがえないあなた自身なのですよ、と。周りの人と何が違う。人と同じことが自分だけできない。そうしたことを感じると、思い詰めるほど苦しんでいる人に「死ぬほどのことじゃない」などと言いつつのは、強者の論理の前に弱者の心を殺すことに等しい。自らがマイノリティーであると表明する勇気と同じくらい、秘めていたいという意思は尊重されなくてはならないはずだ。「できるかな」の脚本を担当した蓬萊泰三は、有名な合唱組曲「チコタン」の作詞者でもある。「ぼく」の初恋のチコタンがダンブにひかれて死ぬ。希望も慰めも訪れぬまま、「ぼく」の絶望の叫びで曲は終わる。人の悲しみを勝手に解釈し、わかったなんて言うなどはかりに。互いの心を、尊敬を守り合うことこそが、ともに生きるということだ。しゃべらないノッポさんは、テレビの世界の外では子供たちに、実に美しい敬語で語りかけていた。

お元気ですか。

気づいたらもう初夏です。そろそろ健康診断も終わりになりますね。身体計測や内科検診の時の「着衣」について、皆さんの学校ではどのようにしましたか。子どもたちへの配慮ができたでしょうか。生理用ナフキンのトイレ設置についてはどうですか。

どんな時でも子どもたちが安心して学校生活を送ることができるように、自分でできることから始めましょう。すぐには実現できなくても、まずは自分から声をあげましょう。その時に一緒に声をあげてくれる同僚がいたらいいですね。自分の思いや願いを打ちかけられる人が職場に1人いればどんなに力強いことでしょう。仲間づくりもファイト!

折々ことば

鷲田清一 2089

なにかを知るという行為は、身軽に飛ぶことではなく、重荷を負って背をかかめることとなるのです。人は何かを知ることでもっと遠くへ行ける、もっと新しい世界が開けると思っている、それはいま以上に「大きな未知の世界を、眼前にひきすえた」ということなのだ、劇作家・評論家は言う。人はそこに開けてくる光景に無関心でない心で刻んだのであり、だから他人の言葉にも深く耳を傾けるようになる。『私の幸福論』から。

福田恆存

2021・7・19

◇生理用ナフキンをトイレに設置している市町村(23年6月10日現在)
弘前、五所川原、平川、野辺地、中泊、南部、平内、横浜、六ヶ所、〈新婦人調査〉

集まろう! 話しまろう!

23年6月24日(土) 県教育会館にて

県教組養教部 総会 10:00~12:00

県教組定期大会 13:00~18:00

懇親会 18:00~

申込みは どちらも 県教組 017-734

-7279まで

夏の学習交流集会

① 23年7月29日(土)~30日(日)

② 神戸市立中央区文化センター

→申込み大切

1次 7月7日(金)

最終 7月21日(金)



JR浪岡駅では数年前からプラットホームの時計がなくなり、電子表示板(行先と時刻表示)がなくなり、17時前には駅員がいなくなり、今年は緑の窓口もなくなりました。ホック時刻表(県内の鉄道時刻一覧)も作らなくなりました。効率化・利益優先で人の手を通した温かなサービスが激減しています。これで豊かな社会といえるでしょうか。怒りがふつふつと湧いてきます。文責 阿部陽子 スマイルサポート(017-722-3749)

ごく普通だと
思われていた子が
事件を起こす。

やりそうだと
思われていた子の問題より
周りのショックは大きい。

そこでは大人の見込みが
はずれているからだ。

親や教師は
分かっている
思っていた一族である。

世の中は、
目に見えて問題のある
子への対応に、
エネルギーを注ぎ続けている。

現実問題として、
やむを得ないという
意見も分かるが、
つまらない結論だ。

考えてみて欲しい。
取り柄と言って
何があるわけではないが、
真面目にきちんと生活している。

特別な問題を起こすわけではない。
いわゆる平凡な子だ。



こういう生徒を
教師は記憶していない。

教師だけではない。
各分野のいわゆる専門家は、
手のかかる子や
問題を抱えた人のために骨をおり、
充実感と挫折感の間で舞い踊る。

そして学校に迷惑をかけず、
家でも忙しい両親を支えていた子の
抱えた込んだ無理に気づかない。

手のかからない、
本当にいい子だと
親から言われていた娘が亡くなった。

薬の誤飲とも、
自殺とも、
判別しかなる状態だった。

「我慢ばかりして、
いい子を演じ続けた
子ども時代だったと思う」

